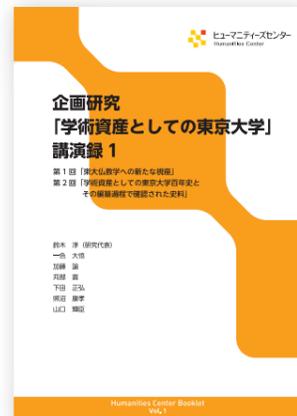


[ブックレット]

東京大学ヒューマニティーズセンターには、人文学及び隣接諸分野に関する新たな研究協創を目指した刊行物として「Humanities Center Booklet シリーズ (ISSN : 2434-9852)」があります。この

発行は、本センターで最も意の用いられた事業の一つです。現在、発刊されたブックレットは、以下のとおりです。



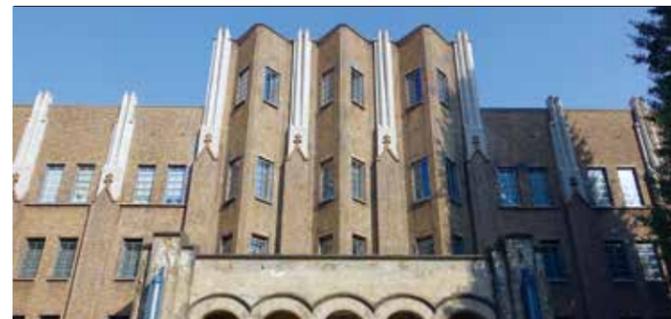
Vol.1 企画研究「学術資産としての東京大学」講演録1 (第1回「東大仏教学への新たな展望」; 第2回「学術資産としての東京大学百年史とその編纂過程で確認された史料」) 2019年8月31日発行



Vol.2 企画研究「21世紀における共生の理論と実践」世界哲学としてのアジア思想 (2018年12月9日国際シンポジウムより) 2019年9月15日発行



Vol.3 企画研究「学術資産としての東京大学」講演録2 (第4回「古くて新しい学術資産—東京大学の埋蔵文化財—」) 2019年9月30日発行



東京大学ヒューマニティーズセンター (HMC)

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学総合図書館内4階
ヒューマニティーズセンター事務局
Tel : 03-5841-2654 (EXT. 22654)
Email: humanitiescenter.utokyo@gmail.com
URL: <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/>



HMCは、思想・歴史・言語・文学・教育・芸術・建築・生活等にわたる人文学及び隣接諸分野における卓越した研究者による部局横断的な新たな研究協創のプラットフォームを目指しています。

Humanities Center News Letters

Vol.01
[2019 November]



[機構長挨拶]

「人間とは何か」をともに考える：
人文学を中心とする新たな学問領域の創成を目指して

[ヒューマニティーズセンター(HMC)とは]

・ロゴマークについて
[オープニングセレモニーの開催]
[LIXIL潮田東アジア人文研究拠点(LUI)]

[HMCオープンセミナー]

[ブックレット]
[お問い合わせ]



Photo:Suzuki Jouji

[機構長挨拶]

「人間とは何か」をともに考える： 人文学を中心とする新たな学問領域の創成を目指して

東京大学は創設以来、他の分野と同様、人文学分野においても多くの領域で日本ならびに世界の学術に大きな貢献を果たしてきました。また、現在地球規模で進捗しつつある人類社会の急激な変化に対応するための学知として、人文学をコアとする新たな学問領域の創成が強く求められています。加えて、東京大学新図書館計画によって新たな研究のための資源が可視化され、学内に分散している卓越した研究者が集い交流する機運も熟しつつありました。そうした中、株式会社LIXILグループおよび潮田洋一郎氏から、東京大学の人文学研究に対する財政的支援のお申し出をいただきました。

これを機に、2017年(平成29年)7月1日より、法学政治学研究所、人文社会系研究科、総合文化研究科、教育学研究科、情報学環、東洋文化研究所、史料編纂所、総合図書館の8部局による連携研

究機構として「ヒューマニティーズセンター (Humanities Center: HMC) を設置し、その責務に応えることとしました。HMCは、思想・歴史・言語・文学・教育・芸術・建築・生活等にわたる人文学及び隣接諸分野における卓越した研究者による部局横断的な新たな研究協創のプラットフォームを目指しています。



ヒューマニティーズセンター機構長
齋藤 希史
人文社会系研究科教授

[オープニングセレモニーの開催]

2018年7月24日(火)において、HMC研究スペースの完成を記念して、プレスリリース、記念講演会、ならびにレセプションパーティーからなるオープニングセレモニーを、東京大学総合図書館4階ならびに伊藤国際学術センターにて開催しました。

記念講演会の聴講者は、学外招待者を含む総勢約250名を数え、盛況のうちに終了することができました。

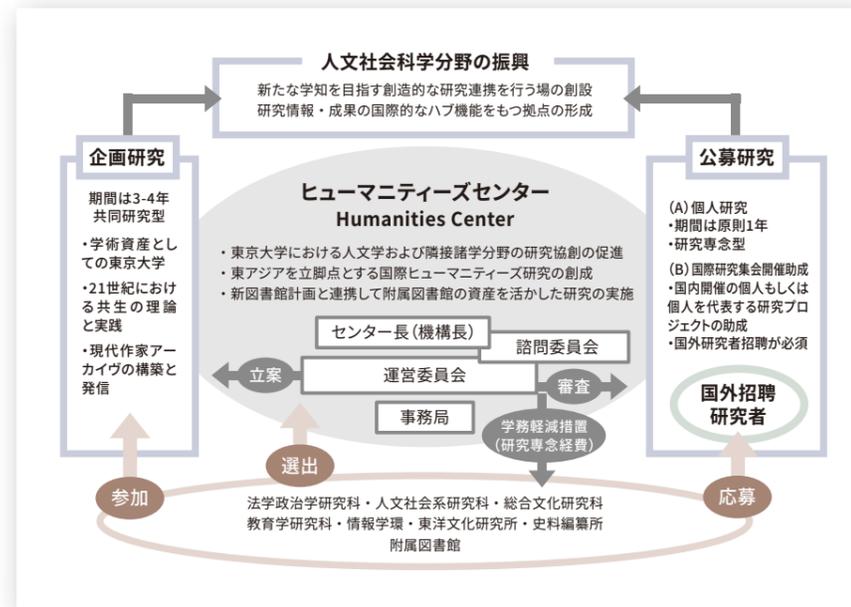


五神真東京大学総長、潮田洋一郎氏 (HMC名誉フェロー)、齋藤希史HMC機構長によるテープカットセレモニー

本セレモニーは、LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative (LIXIL潮田東アジア人文研究拠点) を中心とするHMCの本格的始動を記念して開催されたものです。



[ヒューマニティーズセンター(HMC)とは]



HMC機構長、ならびに連携部局から選出された教員で構成された運営委員会を中心にして、「企画研究」、「公募研究」、オープンセミナー、HMCブックレットの発行、その他人文学及び隣接諸学分野における研究活動を展開しています。

HMCの研究拠点室および事務局は、東京大学総合図書館内4階に設置されています。

齋藤希史機構長の開会の挨拶で幕を開け、元東京大学総長の蓮實重彦氏により「「ポスト」をめぐる」についての特別講演がありました。



蓮實重彦氏の記念講演内容は、「「ポスト」をめぐる—「後期印象派」から「ポスト・トゥルース」まで」『新潮』第116巻第2号(2019年2月)に掲載されました。



HMCのロゴにある四角は「情報」を象徴します。各連携部局が連なり、情報を共有しながら、熟成した知識(オレンジ色)をHMCへ集約させるというイメージです。



潮田洋一郎氏、五神総長、蓮實重彦氏、石井洋二郎東京大学理事・副学長、齋藤機構長によるラウンドスピーチが行われました。



Photo by Suzuki Jouji

[LIXIL潮田東アジア人文研究拠点(LUI)]

LIXIL潮田東アジア人文研究拠点 (LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative : LUI) とは、株式会社LIXILグループおよび潮田洋一郎氏の財政的支援により、HMCでの研究活動において、日本を含む東アジア研究を一つの柱とする新たな国際人文研究です。その概要は、(1)「企画研究」、(2)「公募研究 (A)」、(3)「公募研究 (B)」という3つのカテゴリーによって部局や領域を横断する共同研究を推進し、さらにそれぞれの研究相互の対話を積極的に進めることで、新たな学知の創造を目指すものとなっています。



「学術資産としての東京大学」及び「21世紀における共生の理論と実践」の2つの研究プロジェクトがスタートしました。さらに、2018年7月より、新プロジェクトとして「現代作家アーカイブの構築と発信」が加わりました。

(1) 企画研究

企画研究は、HMCの立案による1プロジェクト5名程度の共同研究とし、当面、2から3プロジェクト程度を3年（場合によって4年）で実施します。複数の連携部局から教員が参加し、HMCにはフェロー（兼務教員）として所属することになります。2017年7月から、

学術資産としての東京大学

研究代表：鈴木 淳
 参画教員：鈴木 淳（人文社会系研究科）、佐藤 健二（人文社会系研究科）、吉見俊哉（情報学環）、山口 輝臣（総合文化研究科）、小国 喜弘（教育学研究科）、尾上 陽介（史料編纂所）、一色 大悟（人文社会系研究科）
 概要：1877年の創立以来、東京大学は東アジアの学問の蓄積のうえに世界の知を吸収し、近代日本の学術研究の発展の基幹を担ってきました。学知の共同体である大学が、社会や国家や人類といかにかかわることが望ましいのか、歴史として忘れかけたことや、なし得なかったことも含めて、自らのアイデンティティ構築の歩みをふりかえる必要があります。東京大学の大学史全体を学術資産ととらえ、図書館や部局に保存されている記録や文書を参照できるアクティブな仕組みの構築が求められていることから、その創成のために研究科横断的な連携による企画研究をおこないます。



資料提供：東京大学文書館

21世紀における共生の理論と実践

研究代表：梶谷 真司
 参画教員：梶谷 真司（総合文化研究科）、中島隆博（東洋文化研究所）、吉見俊哉（情報学環）、佐藤麻貴（総合文化研究科）
 概要：共生とはつねに多様な他者との共生ですが、今日における共生の難しさは、この多様性じたいがきわめて複雑で変わりやすいということであろう。国籍や性別に典型的なように、日本人か外国人か、男性か女性かどちらかに単純に分けることはもはやできず、その間には様々なグラデーションが存在し、その境界も状況により変化します。貧困、過疎、教育、労働、障害、病気などに関しても、誰がどこでどのような問題に抱えているのか、かつてよりはるかに錯綜して把握しにくくなっています。そうして私たちは、境界線を引き直しますが、それが新たに排除を引き起こしてしまうことも事実です。これからの共生の問題は、こうした境界と排除のたえずる関係を多面的に考察しなければならないでしょう。本企画はそのために国際的な協働と文理融合の学際研究を目指し、なおかつ、たんに学問的な理論研究にとどまらず、NPOやNGOなどの組織とも連携し、社会的実践としても活動を展開させます。具体的な活動としては、

国内・国際ワークショップ、セミナー等の開催、国内・海外調査研究、NPO・NGO等の外部団体との連携活動を予定しています。



現代作家アーカイブの構築と発信

研究代表：武田将明
 参画教員：武田将明（総合文化研究科）、阿部公彦（人文社会系研究科）、梶谷真司（総合文化研究科）、佐藤麻貴（総合文化研究科）
 概要：「現代作家アーカイブ」は、現代の日本語文学を代表する作家の生の声を記録に残し、国内外の多くの人々に現代日本文学の意義を伝えることを目的として、構築されるものです。飯田橋文学会（作家の平野啓一郎氏を中心とする、作家・研究者・編集者などの集まり）に所属する作家・研究者・編集者と、本学の複数部局の協力により、すでに15名の作家・芸術家にインタビューを実施し、その成果はインターネットでの動画配信や東京大学出版会からの刊行物という形で公開されています。今後も、基本的に3ヶ月に1回ほど、現役の作家へのインタビューを実施する予定です。



(2) 公募研究 (A) 【個人研究】

連携部局所属教員を対象とする公募制度を通じて、思想、歴史、文学、教育、芸術、建築、生活等にわたる人文学および隣接諸学分野に関して、国外から研究者を長期間招聘して行なわれる共同研究、または個人で行なわれる研究です。これまでに、日本文学、日本史、中国文学、東洋史、西洋古典学、心理学、博物館学、カルチュラル・スタディーズ、国際関係学など、13件の公募研究が採択されました。

(3) 公募研究 (B) 【国際研究集会開催助成】

日本国外の学術機関に所属する研究者を招聘し、国内で開催される人文学および隣接諸学分野（思想、歴史、文学、教育、芸術、建築、生活等）の国際研究集会を支援する新たな事業です。

[HMCオープンセミナー]



2018年9月より、LUI「公募研究(A)」の採択者を中心とした「オープンセミナー」が一般公開形式で開催されています。



毎回多くの聴講者が活発に議論できる多分野横断型研究活動の「場」が形成されつつあります。

オープンセミナーの内容

	題 目	報告者	ディスカッサント等
第1回 (2018/9/28)	マンジュ王朝として的大清帝国: 帝国統治と国際秩序	杉山清彦 (総合文化研究科)	松方冬子 (史料編纂所)
第2回 (2018/10/12)	近代「美人」言説における小野小町	永井久美子 (総合文化研究科)	林香里 (情報学環)
第3回 (2018/10/26)	『外交』とはなにか—言葉を考える—	松方冬子 (史料編纂所)	葛西康徳 (人文社会系研究科)
第4回 (2018/11/9)	戦時・占領時の性を問う— 先行研究から見るフィリピン関係資料	岡田泰平 (総合文化研究科)	
第5回 (2018/12/14)	日本の古典文学と古代ギリシア文学の比較— 詩歌と社会の視点から—ギリシア悲劇と能	葛西康徳、末吉未来 (人文社会系研究科)	菅原克也 (総合文化研究科)
第6回 (2019/1/11)	北インド系海外労働移民1857-1869年: 要因・仲介人・信頼の役割	Crispin Bates (東洋文化研究所)	池亀彩 (情報学環)
第7回 (2019/2/8)	能の体験とギリシア抒情詩の考察	Vanessa Cazzato (人文社会系研究科)	葛西康徳 (人文社会系研究科)
第8回 (2019/3/11)	屋根裏について	菅原克也 (総合文化研究科)	
第9回 (2019/4/12)	国連平和活動において性的暴力が許容されている背景: 社会学的行動科学の観点から	マーシャ・ヘンリー (総合文化研究科) キハラハント愛 (総合文化研究科)	
第10回 (2019/4/26)	日本占領期の性—米兵の残した文学作品から	岡田泰平 (総合文化研究科)	

	題 目	報告者	ディスカッサント等
第11回 (2019/6/14)	武人政権として的大清帝国と日本近世国家	杉山清彦 (総合文化研究科)	金子拓 (史料編纂所)
第12回 (2019/6/21)	歴史をクリア化する: 監視される植民地期南アジア系海外移民の親密性	Crispin Bates (東洋文化研究所)	池亀彩 (情報学環)
第13回 (2019/7/12)	村上直次郎と岩生成一 —近代歴史学と欧文史料による日本史—	Birgit Tremml-Werner (史料編纂所)	松方冬子 (史料編纂所)
第14回 (2019/7/26)	「恋愛歌人」としての和泉式部と女人往生 —近代以後の和泉式部伝における「くらきより」歌の評価	永井久美子 (総合文化研究科)	菅原克也 (武蔵野大学)
第15回 (2019/8/9)	国連のアカウンタビリティ: 国連平和活動における性的暴力と搾取 —社会的アカウンタビリティから法的アカウンタビリティまで	マーシャ・ヘンリー (総合文化研究科) キハラハント愛 (総合文化研究科)	
第16回 (2019/8/12)	Recording Atomic-Flash Burns, Archiving and its Living Legacy	Jonathan Reinartz (パーミンガム大学)	岡田泰平 (総合文化研究科)
第17回 (2019/10/25)	賀茂別雷神社の算用状から何が明らかになるのか —歴史学と会計学から—	金子拓 (史料編纂所)	三光寺由実子 (和歌山大学)
第18回 (2019/11/25)	文学研究と美術研究の越境—明治小説の口絵・挿絵を考える—	出口智之 (総合文化研究科)	
第19回 (2019/11/29)	王の手紙、皇帝の文書: —外交の世界史に向けた韓国、タイ、日本の鼎話の試み	パーワン・ルアンシン (チュラーロンコーン大学) ティーラワット・ナ・ボンペット (チュラーロンコーン大学) 鄭東勲 (ソウル教育大学) 丘凡眞 (ソウル大学教授)	松方冬子 (史料編纂所)
第20回 (2019/12/20)	「社会科学と人文学の対話— 『国書がむすぶ外交』『総論』を素材に—	松方冬子 (史料編纂所) 山下範久 (立命館大学) 岡本隆司 (京都府立大学) 廣野美和 (立命館大学)	松方冬子 (史料編纂所)
第21回 (2019/12/23)	日中比較近現代文学史の構想(仮)	伊藤徳也 (総合文化研究科)	
第22回 (2020/1/24)	対人認知における人相の影響(仮)	鈴木敦命 (人文社会系研究科)	
第23回 (2020/2/7)	博物館の原理に関する研究:空間・集い・経験(1)(仮)	新藤浩伸 (教育学研究科)	
第24回 (2020/3/2)	ポピュラー文化・ストーリーテリング・アーカイブ(1)(仮)	水越伸 (情報学環)	